

第四章 三つの金のかげら

星の子は三年間、世界中を歩き回りましたが、母親を見つけることはできませんでした。

星の子はある日、大きな壁で周りを囲まれた、川のそばにある街の門に着きました。

そこにいた兵士たちが星の子を止めました。

「お前はここで何をしているのだ？」と彼らは尋ねました。

「僕は自分のお母さんを探しているのです」と星の子は言いました。

「僕を通してください。お母さんはおそらくこの街にいるのです」

「お前の母親とは誰で、どうして彼女を探しているのだ？」と別の兵士が尋ねました。

「お母さんは僕みたいな貧しいこじきで、僕はお母さんに対してとても冷酷でした。今、僕はお母さんの許しが欲しいのです」

しかし、兵士たちは笑いました。

「お前はとても醜い。醜い子どもを好きな母親なんて一人もいないよ。お前の母親はお前を見たらうれしくないだろうよ。私たちと一緒に来なさい。お前を奴隷にして売りつけよう」

兵士たちは星の子を、一杯の甘いワインの値段で一人の老人に売りました。

この老人はリビヤ出身の魔法使いでした。

魔法使いは少年を暗い牢獄に連れて行き、少年に古いパン一切れと汚い水を与えました。

翌日、魔法使いは「お前は今から森の中に入って行かなければならない。森の中には金のかげらが三つある。一つは白い金のかげら、一つは黄色い金のかげら、そしてもう一つは赤い金のかげらだ。お前は私の奴隷だから、もし白い金のかげらを私に持って来なければ、私はお前を百回鞭打つだろう」と言いました。

そこで星の子は白い金を探しに森へ行きましたが、たくさんのイバラや危険な植物しか見つかりませんでした。

星の子はどこにも白い金を見つけることができなかつたのです。

太陽が消え始めると、少年は泣き出しました。

魔法使いが自分を鞭で打ちたがっていると知っていたからです。

突然、星の子は苦痛の叫びを耳にし、わなにかかった小さな野ウサギを見ました。

星の子は自分の問題を忘れました。

彼は野ウサギに対して哀れみの気持ちを持って、わなを開けてやりました。

「ありがとう、君はとても優しいね」と野ウサギは言いました。

「君のおかげで僕は自由を手に入れている。君に何をあげられるだろう？」

「僕は魔法使いのために、白い金のかげらを見つけなくちゃいけない。もし僕がそれを魔法使いの元に持って行かなければ、彼は僕をぶつだろう」

「僕が君を助けるよ」と野ウサギは言いました。

「白い金をどこで見つければいいか知っているよ」

野ウサギは星の子を一本の木のところへ連れて行き、星の子はその木の中に金を見つけました。

星の子はとてもうれしくて、野ウサギに感謝しました。

星の子は街に戻りました。

しかし、街の門のところに一人の老人がいるのを見ました。

この老人はとても貧しく、とても病んでいました。

「わしにお金をいくらおくれ。もしお前がお金をくれなければ、わしは空腹で死んでしまう！」と老人は叫びました。

星の子は老人に対して哀れみの気持ちを持ちましたが、彼は魔法使いに渡すための白い金のかげらしか持っていませんでした。

「この老人は僕よりもお金を必要としている」と星の子は思い、老人に金を渡しました。

星の子が金を持っていないと分かったら、魔法使いはとても怒り、星の子をぶちました。

魔法使いは、食べ物も飲み物もない牢獄に星の子を入れました。

翌日、魔法使いは「今日お前は森へ戻って、黄色い金のかげらを見つけなければなりません。もしこれをしなければ、私はお前を三百回ぶつだろう」と言いました。

少年は森の中へ行き、金を探しました。

星の子は一日中探しましたが、それを見つけることができませんでした。

星の子はとうとう一本の木の下にしゃがみ込み、泣き出しました。
野ウサギが星の子の声を聞いて、「君はどうして泣いているの？」と尋ねました。
「僕は黄色い金のかげらを見つけなくちゃいけないんだ。もしそれを見つけられなければ、魔法使いが僕をぶつだろう」
「僕について来て。君に黄色い金を見せてあげるよ」と野ウサギは言って、星の子を水たまりまで連れて行きました。
この水たまりの底に、星の子は黄色い金のかげらを見つけました。
星の子は街に戻りましたが、街の門のところでまた老人に会いました。
「わしにお金をいくらおくれ。もしわしにお金をくれなければ、わしは空腹で死んでしまうだろう！」と老人は叫びました。
星の子は老人に対して哀れみの気持ちを持ち、彼に金をあげました。
魔法使いはとても怒りました。
「何だって！？ 金がないだって？ 金がないなら、食べ物も飲み物もなしだ！」
魔法使いは星の子をぶって鎖でつなぎ、また牢獄に入れました。
翌日、魔法使いは「今日お前は森へ戻って、赤い金のかげらを見つけなければならない。もしそれを見つければ、お前は自由になるだろう。見つけなければ、私はお前を殺すだろう」と言いました。
少年は森の中へ行き一日中金を探しましたが、それを見つけることができませんでした。
その晩、星の子は一本の木の下にしゃがみ込み、泣き出しました。
野ウサギは星の子の声を聞き、「君はどうして泣いているの？」と尋ねました。
星の子が全てを明かすと、野ウサギはまた星の子を助けました。
今度は、星の子は木のそばにあったほら穴の中で金を見つけました。
「ありがとう、ありがとう」と少年は言って、走って街に戻りました。
街の門のところで、星の子は老人を見ました。
「わしにお金をいくらおくれ。もしわしにお金をくれなければ、わしは死んでしまう！」と老人は叫びました。
星の子は老人に対して哀れみの気持ちを持ち、老人に金をあげました。
「あなたは僕よりもそれを必要としている」と星の子は言いましたが、彼はとても悲しい気持ちで、彼の心はとても重いのでした。
「魔法使いは僕を殺すだろう」と星の子は思いました。
しかし、星の子が街の門のところの守衛たちのそばを通ったとき、見張り人たちは星の子にお辞儀をし、「我々の美しき主を見よ！」と言いました。
星の子は街の中を歩いて行きましたが、ますます多くの人々が彼の後について来ました。
彼らは皆、「彼こそが世界で最も美しい少年だ」と言いました。
しかし星の子はとても悲しく、「彼らは僕を笑っているのだ」と思いました。
星の子は長いこと歩き、とうとう王の宮殿のある大きな広場に着きました。
人々は、「あなたは私たちの主だ、私たちの王の息子だ！」と言いました。
「僕は王の息子じゃない。僕は、貧しいこじき女の息子だ。どうしてあなたたちは僕が美しいと言うのだ？ 僕は自分がとても醜いということを知っている」
「どうしてご自分が醜いなどとおっしゃるのですか？ ご覧になってください！」と一人の兵士が言いました。
星の子は兵士の盾を覗き込みました。
その盾は鏡のような銀色でした。
星の子はそこに自分の顔を見て、自分の顔が以前のように美しいと分かりました。
「預言があるのです」と人々は言いました。
「今日、私たちの王様がいらっしゃるという預言が。あなたは私たちの王様です。この王冠と王笏（おうしゃく）をお取りください。正義と慈悲で私たちを治めてください」と人々は言いました。
「いいや、僕は悪い少年なのだ」と星の子は答えました。
「僕はお母さんを見つけなければならない、王冠と王笏（おうしゃく）を受け取ることはできない」

星の子は街の門の方を振り返りました。
群衆の中に、自分の母親であるこじきの女が見えました。
そして女の隣には、街の門のところにいた老人が見えました。
星の子は女の元へと走って行って、女の前にひざまずき、その足にキスをしました。
「お母さん、本当にごめんなさい。どうか僕を許してください。かつて僕はあなたに僕の憎しみを与えました。今度は僕にあなたの愛を与えてください」
しかし、女は何も言いませんでした。
星の子は老人に話しかけました。
「お願いです、僕はあなたを三回助けました。僕のお母さんに、僕に話しかけてくれるように言ってください」
しかし、老人は何も言いませんでした。
星の子は泣き出しました。
「僕を許してください、お母さん。どうか許してください」
女は自分の手を少年の頭の上に置いて、「立ち上がりなさい」と言いました。
老人も自分の手を少年の頭の上に置きました。
立ち上がったとき、こじきの女は女王で、老人は王だと星の子は気づきました。
女王は星の子に、「こちらはお前のお父さんだ。お前はお父さんを三回助けたのだ」と言いました。
そして王が星の子に言いました。
「こちらはお前のお母さんだ。お前はお母さんの足をお前の涙で洗ったのだ」
少年は二人を抱きしめ、両方にキスをしました。
二人は星の子を宮殿に連れて行き、星の子の頭に王冠を乗せ、星の子の手におうしやくを握らせました。
星の子はとても善良な王で、皆に正義と慈悲を示しました。
星の子は、木こりと彼の家族に贈り物を届けました。
星の子は貧しい人々を助け、動物たちや鳥たちに優しくし、そしてあらゆる土地に平和がもたらされました。
残念なことに、人生で多くの苦しみを経験したせいで、星の子は三年後に死にました、そして次の王は冷酷な王でした。